

第 2 章

未婚者が結婚式・披露宴を「行いたい」と考える意識について
～多くの未婚者が「行いたくない」と否定する時代にあって～

今 井 重 男

目 次

1. 緒言
2. 仮説の考え方
 2. 1. 通過儀礼と贈答の考え方に基づく仮説
 2. 2. 未婚率上昇に基づく仮説
3. 未婚者意識調査
 3. 1. 調査内容
 3. 2. 分析方法
4. 仮説の検証
 4. 1. 分析結果 - クロス集計
 4. 2. 分析結果 - 因子分析
 4. 3. 分析結果 - 順序ロジスティック回帰分析
5. 結言

1. 緒言

本稿は、今後ブライダル市場を利用する可能性のある現在未婚者の婚姻儀礼¹、それも結婚式と披露宴に関する意識を、男性と女性を比較しながら探るものである。

人々の一生では節目節目に儀礼が行われる。人類学者 Gennepe (1909) は、人は誕生から死まで折々の儀礼を分離・過渡・統合の過程でたどる“通過儀礼”の視点でまとめた。我が国の通過儀礼の代表といえば、誕生、成人式、結婚、葬式などで、これらをひとくくりに冠婚葬祭と呼称することもある。

通過儀礼のうち、人類にとって普遍的な営みの一つが婚姻と言えよう。しかし、婚姻にまつわる各種儀礼は、地域、社会階層、時代、年齢によって方法や捉え方、表現法が異なる。たとえば、“女”偏に、「日が暮れて暗い」という意味の“昏”と書く「婚」の字が示すように、婚姻の関連儀式は元来、夜間に実施していた。現在は日が落ちてから催すことは稀である。また、我が国の結婚式に神道が採り入れられ、その教えに従い儀礼が行われるようになったのは明治時代以降であり、決して“古式床しき”でもない。さらに、披露宴が専門の式場やホテルなどで実施されるようになったのも近年のことで、1950年代中頃までは結婚式と共に主に新郎の家で行われていた。そして最近の例であれば、結納の実施や仲人を立てての婚姻は、前者は11%、後者が1%と、昭和の時代に当たり前とされていたことが省かれ変化を遂げている²。こうしたことを見ただけでも、我々の興味関心を論攷するには、社会学、人類学、民族学、宗教学などの他、産業構造やサービスに目を向けるのであれば経営学の視点も必要になる。すなわち、婚姻儀礼学（ブライダル・サービス学）などと言った学問分野が存在しないがゆえに、上述した各種学問領域を紡ぎながら考察しなければならないのである。

「生涯未婚率」という統計指標がある。これは50歳時点で結婚経験のない割合の推定値として、45歳～49歳の未婚率と50歳～54歳の未婚率の平均によって算出される。それによれば、1990（平成2）年時点での生涯未婚率が男性5.6%、女性4.3%であったのに対して、2015（平成27）年の推定値は男性23.4%、女性14.1%まで高まった。繰り返しになるが、生涯未婚率は50歳時点で結婚経験のない人の推定値であり、確実に生涯未婚で

1 婚姻は結婚の法律用語である。しかし本稿では、法律的な用語使用にとどまらず通過儀礼の意味合いを込める場合にも婚姻を使用する。

2 「ゼクシィ結婚トレンド調査2018」首都圏版。

過ごす割合ではない。本当に生涯独身であったかどうかは、その人が死亡して初めて確定するからである。しかし、50歳時点で未婚ということは、少なくない確率で将来的に結婚しないであろうと推定し、生涯独身で過ごす人の割合を示す指標として用いられる。我が国は、25年の間に男性は4倍以上、女性も3倍以上未婚率が上昇した。2008年に刊行された『婚活時代』は、“就職活動”のアナロジーとして、結婚を目指した能動的活動、すなわち“結婚活動”の存在を世の中に知らせた。以来、さまざまな局面で婚活が取り上げられている。新しく造語され、センセーショナルなインパクトを世に与えた婚活という語は、中年の独身者や一定程度の年齢に到達すればきっと結婚しているだろうと考える者に対して、あるいはこうした人々の親世代らの、結婚に関する認識を大きく変えさせた。前述の生涯未婚率の増加と婚活する現代の日本は、有名なボードゲームである「人生ゲーム」のように、つまり、ある通過点（時点）を越えると誰もが結婚するという状況ではない。

こうした変化を伴う婚姻儀礼について未婚者の意識を分析することは、将来のブライダル市場を予測するといったビジネス面に留まらず、婚姻関連の通過儀礼に対する考え方や、それ以前に人生の重要な選択である婚姻そのものへの思いを論攷することとも言える。本稿の問題意識に近い先行研究として南（1998）を挙げておきたい。本稿の仮説導出で利用した理論の一部と、実証分析で用いるデータの設問項目について同論文を参考にした。ただし南（1998）の調査は、現在を遡る20年前、しかも生涯未婚率が一桁台の時代における未婚者の考えである。加えて、データの分析方法は全く異なり独自な内容としている。近年の生涯未婚率の急増を通じて、未婚者の婚姻儀礼に関する考え方に何らかの変化が生じていると疑うのは不自然ではないだろう。本稿では、こうした点からも、婚姻儀礼に対する未婚者の最新の考えを探ることとなる。

本稿の構成は次のようになる、続く第2章で、理論的枠組みと未婚率上昇という実相整理を通じて仮説形成する。次の第3章では、2018年3月に未婚者を対象に実施した調査の概要と、実証分析の方法を説明する。第4章で実証分析による仮説検証を行い、最後の第5章で本稿の結言として論攷結果を述べる。

2. 仮説の考え方

2.1. 通過儀礼と贈答の考え方に基づく仮説

我が国で実行されている結婚式・披露宴といった婚姻儀礼は、通過儀礼としての要素と、贈答行為からなる要素を備える。それぞれの要素について以下論攷し、仮説設定に援用する。

「未婚者が結婚式・披露宴を行いたいと考える理由」～多くの未婚者が行いたくないと考える時代の一考察～

婚姻儀礼は、「未婚」の状態から「既婚」への、社会的状況の変化を表す通過儀礼として看做すことができる (Genep,1909)。婚姻以外もそうであるが、通過儀礼は年齢の階梯を経ていく過程で発生する個々人の変化の前後をはっきりとさせるために、時間的結界、すなわちある時点を通過する儀式として執り行われる (Leach,1976)。さらに清水 (1988) によれば、本来儀礼は宗教的意味を具備し、つまり現実には体験不可能な状況設定としたうえで、神聖あるいは聖性を強調する加工が施される。

たとえば、1970 年代に誕生した天を衝くばかりに大きな“イミテーション”ウエディングケーキでのケーキ入刀は、現在はそれと比較し小ぶりな“本物”のケーキに改められている。ここで言うイミテーションと本物の違いを端的に言うと、食べられるか食べられないか、の違いである。そもそもケーキ入刀なる披露宴での儀礼は、古代ローマの婚礼で「ファール」という葡萄酒に浸した穀粉で焼かれたケーキを穀神ジュピターに捧げた後、新郎新婦が証人の前でそれを食べ、参列者にも振舞われたと言うのが起源とされる (片木,1988)。19 世紀の富裕層の生活を描いた『ボヴァリー夫人』では、エンマの結婚式の模様が詳しく描かれており、ウエディングケーキについて次のように記されている。

「まず一番下には、青いボール箱の四角なのが殿堂をかたどり、廻廊もあれば列柱もあり、まわりに漆喰製の小さな像が立ちならび、それぞれ金紙の星をちりばめた^{がん}龕の中におさまっていた。ついで第二段にはスポンジ・ケーキの櫓が立ち、まわりには、^{アンジェリカ}鎧草の砂糖漬やアーモンドやほしぼどうでこしらえた小さな砦をめぐらしてある。最後に、一番上の平屋根は緑の原で、そこには岩山があり、またジャムの湖水に榛の実の殻で造った舟が浮かんでいた。野原には小さな愛の天使がチョコレートのブランコに乗っているのが見え、ブランコの二本の柱の先には、珠にかたどった本物のばらのつぼみが二つついていた。」

ケーキの詳説は、職人の技巧、凝った装飾、色彩の鮮やかさと共に、それを用意できるといった、富の誇示も窺い知ることができよう。描写されたケーキは、ヨーロッパの城塞や神殿を彷彿とさせるごとく最下段の台座に列柱が立ち並びその上には櫓が重層し、そして壁面に花模様が施された意匠の、あの巨大なイミテーションウエディングケーキ創作に強く影響を与えたことは間違いない。しかも、ケーキを切り分けて招待客に振舞う行為とは全く異なる、新郎新婦が手を携えてナイフを持ち入刀する、“神聖なる初の共同作業”のお披露目儀礼として、イミテーションウエディングケーキでのケーキ入刀は実践されたのである。現在の披露宴でケーキ入刀時に現れるのは、メインディッシュの後にデザート

として供食可能な本物のケーキである。つまり、本来の目的を捻じ曲げ、ある種象徴的な儀式のための道具と化したケーキが、“本来の意味を取り戻した”と考えられる。

巨大なイミテーションウエディングケーキが流行した同時代に、色直した新郎新婦が披露宴会場壁面に設置されたゴンドラに乗って降りながら登場する演出があった。ドライアイスがたかれ、白煙に包まれ降りるゴンドラは、ベニス運河に浮かぶそれを模したものやバルコニー型まで多様であった。実はこうしたゴンドラによる演出についても、参考としたものがあった。それは、17世紀にイギリスで活躍した建築家であり舞台美術家のイニゴー・ジョーンズが仮面劇で用いた移動型舞台装置を真似たと言われる。イニゴー・ジョーンズは仮面劇において、神をいただいた雲や天を飛ぶ馬車を上下左右に動かし、それに照明を当て観劇者を驚かせる演出を行った（片木,1988）。披露宴におけるゴンドラの採用にも、劇中の神が関与する表現、すなわち宗教的意味合いを採り入れていたのである。周知の通り、このゴンドラに乗って新郎新婦が登場する演出は、ひと時の人気が嘘のように衰退してしまった。しかし結婚式専門式場のマリアージュ彦根（滋賀県彦根市）のhpには「親御様が結婚式をされた派手婚と言われた時代に流行したゴンドラ」は「現在最新映像の3Dプロジェクションマッピングと融合して新感覚の演出機材として注目」されており、「全国的にも珍しくなったゴンドラ」はテレビ番組でもしばしば取り上げられて人気上昇していると解説が読める。

以上見てきたイミテーションウエディングケーキや色直し後にゴンドラに乗って入場するなどの消長は、宗教的意味合いや神聖なこととして、南（1998）が述べるように「現実存在する物を用いて、超越的な世界を体験させるという象徴的操作は、儀礼に用いられる物の世俗化あるいは陳腐化という可能性を常に内包する」を體現したものと言えよう。しかもその世俗化や陳腐化は、結婚式や披露宴を実施した経験の無い未婚者にとって、肯定か否定かアンビバレントな影響を与える可能性を秘めるものと考えられよう。

次に贈答行為という視点から結婚式・披露宴を考えてみたい。日本社会では、贈答はかなり古くから制度化された伝統的な慣習の一つと言える。昭和時代ほどではないかもしれないが、平成の時代でも盆暮れにはお中元あるいはお歳暮を贈答品としてやりとりする。また、誕生や結婚、葬式、病氣療養、転勤、新築などの機会にも、お中元やお歳暮同様に、個人と個人、個人と集団、「家」と「家」、集団と集団の間で贈答品のやりとりがある。このように贈答は、我が国においてさまざまな機会で行われ、しかも伝統や礼節に則った“正しい方法”で実施しなければならないと考える、すなわち社会的慣行と不可分の関係を強いられている。

広く社会科学において、贈答行為は互酬性（reciprocity）の概念によって説明されてき

「未婚者が結婚式・披露宴を行いたいと考える理由」～多くの未婚者が行いたくないと考える時代の一考察～

た。この概念は、給付と逆の反対給付という原理に基づく。具体的には、贈答品などの物質的資源や、サービス、愛情、労働などの非物質的な交換可能資源贈与とこれに対するお返しである。つまり贈答はこの互酬性によって制度化された社会的な慣習と説明できる(伊藤,1984)。

結婚式や披露宴を消費者として経験する機会は婚姻時に限定される。しかも経験回数は1回からせいぜい2・3回にとどまり、いわゆるヘビーユーザーは存在しない。しかし、消費者としての経験は1回きりであったとしても、結婚式・披露宴に招待され列席する機会は数回に及ぶ。我が国の結婚式・披露宴は伝統的に招待制を採る。招待制による結婚式・披露宴の実施は、相手を招待する給付と、招待を受ける反対給付といった社会関係を表す贈答の互酬性の概念があてはまる。招待する側は饗応を、招待を受けた側はご祝儀を持参する。さらに言えば、招待し招待された関係が時を経て倒置して発生することもある。相手との関係や給付の内容に応じた返礼の履行期間を経て、贈答が贈答を生む互酬性が機能する(南,1998)。

以上の考察から、儀礼意識、互酬性意識の強さが、宗教的意味合いや返礼志向、さらには伝統や正式な規範などの考え方と相まって、結婚式・披露宴の実施に影響を及ぼす、との仮説が導出される。

2.2. 未婚率上昇に基づく仮説

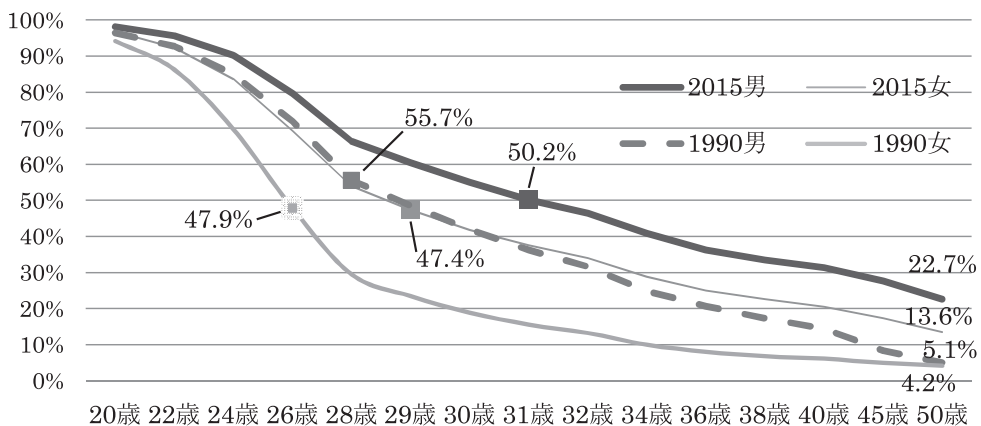
我が国では、「結婚する＝法律婚³」とする考えが普及している。法律婚とは、役所に届け出る、すなわち婚姻届を提出することによる婚姻である。本稿の関心事である結婚式や披露宴は婚姻儀礼であり、結婚しなければ一般に実施されることはない。したがって、法律上の婚姻の状況を見ておくことは、この論攷の主旨に照らし有用な作業と言える。

図表2-1は、1990年と2015年を比較した未婚率推移表である。本稿で考察対象とする20歳から50歳まで、この25年間でほぼ一貫して男女共に未婚率が上昇している。まず観たいのは、平均初婚年齢時点の未婚率である。そもそも、生涯にわたって婚姻しない人もいるため、未婚率の分布は平均初婚年齢以降も逓減が続く。逆に言えば、平均初婚年齢までの期間に多くの未婚者が婚姻していることとなる。平均初婚年齢は、1990年の男性が28.4歳、女性は25.9歳であり、2015年のそれは男性31.1歳、女性29.4歳である。

3 我が国において、制度としての届出婚主義導入の先駆けとなるのは、1875年の太政官達である。この達令によって、婚姻および離婚、養子縁組および離縁については戸籍に登録することによりその効力が生じると規定された。

そしてその年齢での未婚率は1990年の男性が55.7%（28歳値）、女性は47.9%（26歳値）であるのに対し、2015年の男性は50.2%（31歳値）、女性が47.4%（29歳値）となっている。この数値から分かるのは、男性以上に女性の未婚化あるいは晩婚化が顕著なことである。前述のとおり初婚年齢は、男性で2.7歳、女性は3.5歳それぞれ上昇した。別の表現をすれば、平均初婚年齢に至るまでの時間が長くなったのである。単純に時間が長くなれば婚姻する機会も増え、婚姻率の上昇、すなわち未婚率は減少すると考えてもおかしくない。しかし現実には、男性こそ5.5ポイント未婚率が減少しているが、女性は僅か0.5ポイントの減少にとどまっている。つまり、1990年から2015年までの未婚率上昇状況は、女性の平均初婚年齢以降の婚姻の鈍化、すなわち未婚化傾向が顕著であると理解できる

図表2-1 若年・中年未婚者の未婚率推移



我が国の未婚・晩婚化の要因は、親との同居率の高さ、高学歴化や非正規就労に象徴される雇用の不安定さなど、さまざまな分野で多様な手法によって検討されている。その中で、高学歴化との関連において代表的なものの一つに、とりわけ女性の大学進学率の上昇が女性労働者の人的資本を高めるとする自立仮説が挙げられる（Becker,1981）。これは、高学歴が高収入や高度な業務への関与をもたらし、結婚することで得られる収穫を低め、その結果婚姻に消極的となる考え方である。他方で、Oppenhemier 他が主張するつり合い婚仮説では、高学歴な女性は婚姻市場における価値が高く、婚姻により得られる利得も大きいために婚姻意欲が強いと予想する（Oppenhemier,1988）。こうした結婚に対する考え方が、それを象徴する儀礼である結婚式や披露宴の実施にどのようなバイアスを与えるのだろうか。

「未婚者が結婚式・披露宴を行いたいと考える理由」～多くの未婚者が行いたくないと考える時代の一考察～

また、国立社会保障・人口問題研究所が、2015年に実施した「第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」では、18歳から34歳の未婚女性の89.3%、未婚男性の85.7%が「いずれ結婚するつもり」と回答している⁴。しかも、このように回答した女性の59.3%、男性55.2%は「ある程度の年齢までには結婚するつもり」と考えている。“ある程度の年齢”が何歳なのか不明であるが、未婚者は婚姻の意思もあり、さらにその年齢を意識していることが分かる。それでは未婚でいる理由はどうしたことなのか。同調査では、“結婚の障害”の有無と、ある場合にその理由を尋ねている。回答結果は、“障害あり”との考えは男女共に約7割を占め、その最も多い理由は「結婚資金」であった。ある時点までの年齢上昇や高学歴化は平均的な所得を引き上げることが多い。当該調査が目指す18歳から34歳といった若年者の未婚率上昇、つまり晩婚化の進行は結婚資金の面で余裕を生む可能性を帯びる。

このように考えると高額化や費用支弁などの支出に対する意識には世代間や男性女性の差違、さらに最終学歴、就労状況、収入が関係し、それらが結婚式・披露宴の実施に影響する、という仮説が導き出される。次章以降は実証分析を通して、先に述べた通過儀礼と贈答に関わる仮説とこれら仮説を検証していく。

3. 未婚者意識調査

3.1. 調査内容

実証分析に用いるデータは、2018年3月に20歳から50歳までの未婚者を対象とした調査である。調査概要は図表3-1および図表3-2⁵の通りで、回答データ3,000票（男性：1,672票、女性：1,328票）を分析に用いた。

4 同調査の「一生結婚するつもりはない」は女性が8%、男性12%であった。また、結婚と独身それぞれの利点について尋ねた結果は、“結婚に利点がある”とする回答は男性が65%、女性が78%であるのに対し、“独身の利点”は男性84%、女性89%となっている。独身者に尋ねた質問ではあるが、約9割の女性未婚者が“独身に利点がある”と考えていることは、未婚率の変遷と符合する結果と言えるだろう。

5 調査対象は20歳から50歳までの31年齢階層の未婚者である。つまり50代は50歳の1年齢階層分を調査しており、男性が70名、女性は32名と他年代と比較して少ない。本稿では、回答データ数が少ない場合、誤った分析結果をもたらす可能性が否定できないと考え、50歳と40歳代を結合した「40・50代」として分析している。

結婚式、披露宴といった婚姻に関わる通過儀礼を、現代の未婚者がどのように知覚しているのかを測定するために20の設問を用意し、6段階評定を用いて点数化した。それらは、未婚者意識の変数定義として図表3-3にまとめられる。

図表3-1 調査概要

実施時期	2018年3月
調査対象	我が国在住の未婚者(20歳から50歳)までの男女未婚者3,000名
地域 (各地域1,000名)	関東：茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県 関西：滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県 その他：上記 関東 関西に含まない道県

図表3-2 調査対象者の分布状況

		n	男性	女性	年平均 年齢
全体		3,000	1,672	1,328	38.20
性別	男性	1,672	1,672	—	40.07
	女性	1,328	—	1,328	35.84
年代	20代	512	173	339	25.59
	30代	1,005	500	505	34.73
	40・50代	1,483	999	484	47.26
性年代	男性 20代	173	173	—	25.75
	男性 30代	500	500	—	34.96
	男性 40・50代	999	999	—	47.37
	女性 20代	339	—	339	25.51
	女性 30代	505	—	505	34.51
	女性 40・50代	484	—	484	47.04
割付	関東	1,000	584	416	38.67
	関西	1,000	533	467	38.27
	その他	1,000	555	445	37.65

図表3－3 未婚者意識の変数定義

変数名	順序尺度と操作的意義
結婚式志向 披露宴志向	「絶対に行いたくない」(1点)、「行いたくない」(2点)、「やや行いたくない」(3点)、「やや行いたい」(4点)、「行いたい」(5点)、「絶対に行いたい」(6点)の6段階評定 自身の結婚式について 自身の披露宴について
専門業者紹介 自分らしさ あこがれ 一生に一度 自分の社会的立場 相手の社会的立場 親の社会的立場 高額披露宴批判 晴れ姿披露 演出必要性 祝儀で支弁 没個性批判 アットホーム志向 伝統 社会的承認 神聖 儀礼手順重視 儀礼ルール重視	「全くそう思わない」(1点)、「そう思わない」(2点)、「ややそう思わない」(3点)、「ややそう思う」(4点)、「そう思う」(5点)、「強くそう思う」(6点)の6段階評定 式場選びを紹介業者に相談し、紹介してもらうことに抵抗がある 自分達らしい結婚式・披露宴にこだわりがある 結婚式・披露宴に対するあこがれがある 結婚は一生に一度のことだという気持ちがある 結婚式・披露宴に関して自分自身の社会的立場を気にする 結婚式・披露宴に関して結婚する相手の社会的立場を気にする 結婚式・披露宴に関して親の社会的立場を気にする 現在の披露宴はお金がかかりすぎだと思う 披露宴で自分の晴れ姿を披露したい 披露宴の演出は必要だと思う 披露宴の費用はご祝儀で半額以上はまかないたいと思う ホテルや専門式場での披露宴は没个性的だと思う 結婚式や披露宴はアットホームな雰囲気で行いたい 結婚式・披露宴は伝統に従って行うべきだ 結婚式・披露宴は社会的な承認を得る場であると思う 結婚式は神聖なものだと思う 結婚式の1つ1つの手順は、間違っはいけないと思う 結婚式・披露宴にはいろいろ定められたルールがあると思う

3. 2. 分析方法

得られた回答データは、次の手順で分析した。まず、質問変数間の関係を調べる最も基本的な分析方法であるクロス集計を作成し分析する。本稿では、「結婚式」、「披露宴」それぞれについて、実年齢を10年齢階層でくくった「年代」⁶、「性別」の2変数でクロス集計を実施し、あわせて変数間の関連パターンを見るために t 検定を行っている。

次に分析対象者すべてを対象に未婚者意識の変数に関する因子分析を実施した。因子分析は、各変数の背後に潜む共通因子を探索する分析法である。今回これを用いた理由は、未婚者が抱く結婚式、披露宴に対する基底の考え方を要約して理解するためである。次の段階として、「結婚式の志向」、「披露宴の志向」を従属変数として、因子分析で得られた4種の因子得点を説明変数に選び順序ロジスティック回帰分析⁷を実施した。これにより、各因子が結婚式・披露宴にどういった影響を与えているのか分析している。

4. 仮説の検証

4. 1. 分析結果 - クロス集計

図表4-1は結婚式について、同4-2は披露宴について「行いたい」と考えるか、「行いたくない」と考えるか尋ねた結果のクロス集計表である。合計欄の数値と比較し5ポイント以上増加もしくは減少したセルを、増加はセルを着色、減少は字体を変え下線を引き

6 脚注5で説明した通り、50歳は40代と結合した「40・50代」として分析した。

7 ロジスティック回帰分析は、予測したい変数である従属変数がカテゴリー変数の際に用いられる手法である。予測したい変数が「はい」、「いいえ」など2種の場合は二項ロジスティック回帰分析を用いるのが一般的であるが、3種以上の場合は多項ロジスティック回帰分析や順序ロジスティック回帰分析を採用する。本稿のような順序尺度を量的変数として回帰分析を行うにはいくつかの注意が必要となる。たとえば、意識変数の尺度の段階の間隔が等しく1であり、それぞれの値は数直線上で等間隔に位置付けられることとなる。ところが、「絶対に行いたい」と「行いたい」間、「行いたい」と「やや行いたい」間、「やや行いたい」と「やや行いたくない」間、「やや行いたくない」と「行いたくない」間、そして「行いたくない」と「絶対に行いたくない」間の間隔が等しいという仮定は予め分かることではない。カテゴリー間の距離が等間隔かどうか不明な場合、順序尺度を用いて重回帰分析を行うと偏回帰係数を正しく解釈できない場合がある。しかも、順序尺度は、連続する2値の間に本来どのような値も存在しないので、差を計ることも実質的に意味がない。こうした問題を解決するために本稿では順序ロジスティック回帰分析を採用して分析を行った。

「未婚者が結婚式・披露宴を行いたいと考える理由」～多くの未婚者が行いたくないと考える時代の一考察～
表示した。

まず結婚式のほうでは、比較的若い年代は「行いたい」、逆に40・50代は「行いたくない」が増加する傾向が観取される。しかもそれは、性別により、より強調されて表出しているようである。男性の20代は、行っても行わなくてどちらでもよい、といった中央化傾向が観られ、年齢が上昇するほど否定的となっていく。他方女性は、20代は「行いたい」が多く結婚式実施に意欲的であり、30代は回答が分散することが観察された。

図表4－1 結婚式実施の志向状況

結婚式について	ぜひ 行いたい	行いたい	やや 行いたい	やや 行いたくない	行いたくない	絶対 行いたくない	合計 (実数)
合計	10.0%	11.6%	17.6%	19.9%	22.7%	18.2%	3,000
性別 男性	7.2%	10.0%	16.6%	22.2%	24.3%	19.7%	1,672
性別 女性	13.4%	13.6%	18.9%	17.0%	20.7%	16.3%	1,328
年代 20代	21.1%	19.1%	18.4%	16.0%	12.5%	12.9%	512
年代 30代	10.9%	11.7%	18.9%	18.7%	20.3%	19.4%	1,005
年代 40・50代	5.5%	8.9%	16.5%	22.0%	27.8%	19.3%	1,483
男性・年代 20代	10.4%	17.9%	24.3%	19.1%	13.9%	14.5%	173
男性・年代 30代	9.2%	9.8%	17.6%	20.0%	23.2%	20.2%	500
男性・年代 40・50代	5.7%	8.7%	14.7%	23.8%	26.6%	20.4%	999
女性・年代 20代	26.5%	19.8%	15.3%	14.5%	11.8%	12.1%	339
女性・年代 30代	12.7%	13.7%	20.2%	17.4%	17.4%	18.6%	505
女性・年代 40・50代	5.0%	9.3%	20.0%	18.4%	30.4%	16.9%	484

一方の披露宴については、意欲的に「行いたい」とする考えが、20代の女性に顕著に表れるものの、男性は上述の結婚式同様に20代は中央化傾向、30代以上は「行いたくない」という、実施の動機づけの低い回答へとシフトする様子が見えてくる。

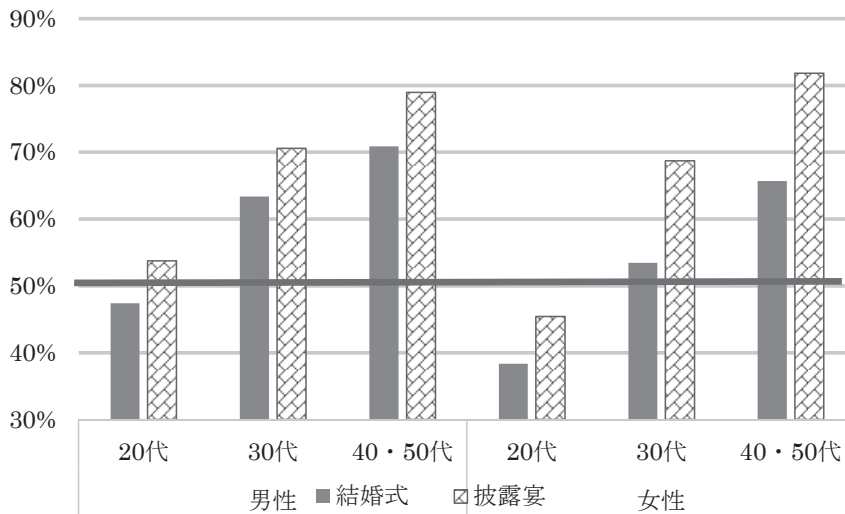
図表4－2 披露宴実施の志向状況

披露宴について	ぜひ 行いたい	行いたい	やや 行いたい	やや 行いたくない	行いたくない	絶対 行いたくない	合計 (実数)
合計	7.5%	7.4%	14.1%	21.7%	27.7%	21.6%	3,000
性別 男性	5.7%	6.6%	13.9%	23.1%	28.2%	22.5%	1,672
性別 女性	9.8%	8.4%	14.3%	19.9%	27.1%	20.6%	1,328
年代 20代	16.8%	15.4%	19.5%	19.7%	15.2%	13.3%	512
年代 30代	8.0%	6.8%	15.6%	20.5%	25.7%	23.5%	1,005
年代 40・50代	4.0%	5.0%	11.1%	23.2%	33.4%	23.3%	1,483
男性・年代 20代	9.2%	12.7%	24.3%	26.0%	13.3%	14.5%	173
男性・年代 30代	7.4%	6.8%	15.2%	21.0%	26.0%	23.6%	500
男性・年代 40・50代	4.2%	5.4%	11.4%	23.7%	31.9%	23.3%	999
女性・年代 20代	20.6%	16.8%	17.1%	16.5%	16.2%	12.7%	339
女性・年代 30代	8.5%	6.7%	16.0%	20.0%	25.3%	23.4%	505
女性・年代 40・50代	3.5%	4.1%	10.5%	22.1%	36.6%	23.1%	484

上記のクロス集計について注目したいのは、「行いたくない」として、未婚者が結婚式・披露宴を否定的に捉える割合である。直観的にそれを理解しようと図表4-3を作図した。各年代について、否定的な考え（「やや行いたくない」、「行いたくない」、「絶対に行いたくない」の合計値）から、意欲的な考え（「ぜひ行いたい」、「行いたい」、「やや行いたい」の合計値）を引いてグラフ化した。これを観ると、男性は20代の結婚式に対する回答を除いて、過半数が結婚式・披露宴に対して否定的であることが分かる。また女性に関しては、結婚式・披露宴共20代での肯定が30代で否定に転じ、40・50代でさらに増加することが分かる。

また、男女それぞれの年代において、結婚式よりも披露宴のほうが否定的に考えられていることも理解できる。未婚者のうち、男女共30代はおよそ70%が、同じように40・50代では80%前後で披露宴実施に魅力を感じていない。この結果は、将来のブライダル市場にどのような影響を与える可能性があるのか刮目相観である。

図表4-3 結婚式・披露宴を「行いたくない」未婚者割合



本節の最後に、男女の回答から得られた平均値に有意な差があるかどうか判別するために、結婚式と披露宴の各回答について t 検定を行った。その結果、結婚式は $t = 6.626$ 、 $p = .001$ 、披露宴は $t = 3.859$ 、 $p = .001$ と計算され、結婚式と披露宴共に男性の方が女性よりも有意に高い平均得点を示し、すなわち「行いたい」とする意志が強い結果となった（図表4-3）。

図表 4－4 男女別の平均値と標準偏差および t 検定結果

	男性		女性		t 値
	平均	SD	平均	SD	
結婚式	4.055	1.499	3.670	1.641	6.626***
披露宴	4.291	1.418	4.078	1.564	3.859***

*** $P<.001$

4. 2. 分析結果 - 因子分析

未婚者意識変数のうち、後述の回帰分析で従属変数として用いる「結婚式志向」、「披露宴志向」を除いた 18 変数に対して最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈の可能性の面から 4 因子解を採用し、2 回目の因子分析を実施した。その結果、因子負荷量が 0.35 に満たない 2 変数（「専門業者紹介」、「没個性批判」）を削除して 3 度目の因子分析を行い、最終的な結果は図表 4－5 に示される。

第 1 因子は、結婚式や披露宴にあこがれ、自分の晴れ姿をお披露目する機会として、自分らしく演出したいと考える変数で構成されていることから、「ブライダル志向」因子と命名する。第 2 因子は、結婚式・披露宴にルールや順序、伝統あるいは社会的承認の機会であるとの変数構成であるので「通過儀礼」因子と命名した。第 3 因子は、親・相手・自分の社会的立場を重視する変数で構成されているので「社会的立場」として、第 4 因子は、アットホームな雰囲気と、披露宴の高額化批判や費用の半額以上を祝儀で賄いたいとする変数で構成されていることから「アットホーム&リーズナブル」とそれぞれ命名した。

前述の通り、因子分析では因子得点も同時に算出した。因子得点は未婚者それぞれに計算され、各因子に対応する個人の回答結果を数値化した内容と言える。図表 4－5 で高い寄与率を示した項目の得点を合計して 4 種の因子寄与を計算した場合、それら 4 つの因子寄与間の相関が「0」になるとは限らない。たとえば、図表 4－5 の最下段の「祝儀で支弁」は、第 1 因子に .306、第 4 因子に .547 の因子寄与を示しているが、第 4 因子の得点のみを項目合計点として取り上げると、第 1 因子への寄与(.306)を無視することとなる。そこで、交差する因子構造の情報をそのまま用いる目的のもと、因子得点を算出し、次節で因子得点を説明変数においた回帰分析を実施する。

図表4-5 未婚者意識の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
	ブライダル志向	通過儀礼	社会的立場	アットホーム&リーズナブル
あこがれ	.830	.226	.229	.067
晴れ姿披露	.763	.276	.268	.029
自分らしさ	.669	.192	.212	.205
演出必要性	.644	.369	.236	.114
一生に一度	.536	.321	.203	.362
儀礼手順重視	.269	.736	.229	.154
儀礼ルール重視	.148	.681	.234	.275
伝統	.307	.632	.297	.094
神聖	.366	.625	.169	.260
社会的承認	.294	.613	.363	.080
親の社会的立場	.249	.308	.756	.119
相手の社会的立場	.263	.275	.743	.237
自分の社会的立場	.306	.282	.740	.108
高額披露宴批判	-.059	.043	.072	.640
アットホーム志向	.316	.289	.122	.579
祝儀で支弁	.306	.237	.151	.547
因子寄与	20.33	18.55	14.60	9.37
累積寄与率		38.87	53.47	62.84

4.3. 分析結果 - 順序ロジスティック回帰分析

続いて、「結婚式志向」、「披露宴志向」を従属変数に置き、前節の因子分析の過程で算出した因子得点を説明変数とする順序ロジスティック回帰分析を行った。

従属変数は、結婚式と披露宴について、「ぜひ行いたい」、「やや行いたい」、「行いたい」、「行いたくない」、「やや行いたくない」、「絶対行いたくない」の6段階評定で求めた順序尺度である。説明変数は、前節で算出した第1因子～第4因子の因子得点と、第2章で導出した仮説検証のために、若年・中年別世代、学歴、世帯年収、就労形態に関するダミー変数

「未婚者が結婚式・披露宴を行いたいと考える理由」～多くの未婚者が行いたくないと考える時代の一考察～

(dummy variable) を作成し組み入れた。

若年・中年を区分する世代ダミーは、実年齢が 20 歳から 39 歳までを若年代と捉え 0 に、40 歳から 50 歳までを中年代として 1 としている（中年票数：1,483 票）。学歴ダミーは、回答者の学歴を大学卒および大学院卒と、それ以外を分けた。具体的には、中学卒、高校卒、専門学校卒、短大・高専卒、在学中を 0 として、大学卒と大学院卒は 1 として作成した（大学・大学院卒票数：1,372 票）。世帯年収ダミーは、世帯年収額回答が 400 万円以下を 0 に、401 万円以上を 1 としている（401 万円以上票数：1,552 票）。最後の就労形態に関する職業ダミーは、正社員（会社員）と正職員（公務員）と、それ以外の契約・派遣社員、パート・アルバイト、自営業、自由業・フリーランスを区分して前者を 1、後者を 0 としている（正社員・正職員票数：1,514 票）。さらに、第 4 章 1 節で行った t 検定の結果で観察された、結婚式・披露宴の志向には男女間で有意な差が生じている点を考慮して男女別に回帰分析を行った。

「結婚式志向」を従属変数に置いた推計では、男性女性共に 4 因子すべてが有意に説明力を持っている結果となった（図表 4-6）。男性は「ブライダル志向」が最も大きな係数を示し、「アットホーム&リーズナブル」の係数は「通過儀礼」と近い。一方女性は、男性と同じく「ブライダル志向」が 1 を超える大きい係数で、次いで「通過儀礼」の係数が高く、その他の因子の影響は男性ほど強くなかった。ダミー変数は男性女性で明らかな違いが現れた。男性の「世帯年収 dummy」が 0.1% 水準で有意に正であるのに対して、女性は「職業 dummy」と「学歴 dummy」が 1% 水準で有意に正である。また、男性女性共「世代 dummy」は有意に負の結果であった。以上のことから、① 4 因子を肯定する未婚者は男女問わず結婚式を行いたいと考える、② 男性は世帯年収が高いと結婚式に好意的、③ 女性は正規労働者であることや高学歴であることが結婚式実施に前向きであり、④ 男女共中年は、若年ほど結婚式を行ないたいと考えない、など解釈できる。

図表4-6 結婚式志向回帰分析結果

	結婚式					
	男性			女性		
	Coef.	S.E.		Coef.	S.E.	
ブライダル志向	1.542	0.065	***	1.815	0.07	***
通過儀礼	0.548	0.055	***	0.621	0.06	***
社会的立場	0.135	0.053	**	0.263	0.056	***
アットホーム & リーズナブル	0.61	0.056	***	0.359	0.068	***
世代dummy	-0.182	0.092	*	-0.182	0.108	*
学歴dummy	0.119	0.092		0.294	0.108	**
世帯年収dummy	0.317	0.099	***	0.046	0.105	
職業dummy	0.089	0.098		0.280	0.106	**
Nagelkerke R^2	0.423			0.547		
n	1,672			1,328		
* $P<.1$ ** $P<.01$ *** $P<.001$						

「披露宴志向」を従属変数に置いた4因子得点の推計は、女性の「アットホーム&リーズナブル」を除き各因子が説明力を持っている結果となった（図表4-7）。係数の強弱正負は、「結婚式志向」の結果とよく似た順序である。一方ダミー変数の男女の違いも、「結婚式志向」の結果と有意、正負が似ている。「結婚式志向」の結果と比較しながら係数等を細かく観ると、男性は「世帯年収 dummy」と「世代 dummy」の係数が大きくなり、女性は「世代 dummy」こそ男性と同じような結果を現したが、「職業 dummy」と「学歴 dummy」の影響は弱まり、他方で「世帯年収 dummy」も有意である。以上のことから、係数の正負を含めた解釈は、①4因子を肯定する未婚者は、女性の「アットホーム&リーズナブル」を除いて披露宴に肯定的、②男性女性共に世帯年収が高いほど披露宴開催を支持、③女性は高学歴であることや正規労働者であることが披露宴に前向き、④男女共中年は、披露宴に対して回避したいと考えており、それは結婚式よりも強く現れている。

図表 4－7 披露宴志向回帰分析結果

	披露宴			
	男性		女性	
	Coef.	S.E.	Coef.	S.E.
ブライダル志向	1.655	0.067 ***	1.855	0.071 ***
通過儀礼	0.571	0.056 ***	0.602	0.06 ***
社会的立場	0.234	0.054 ***	0.389	0.057 ***
アットホーム & リーズナブル	0.418	0.056 ***	0.107	0.068
世代dummy	-0.273	0.093 **	-0.289	0.11 **
学歴dummy	0.062	0.099	0.233	0.107 *
世帯年収dummy	0.373	0.1 ***	0.200	0.105 *
職業dummy	0.02	0.093	0.224	0.109 *
Nagelkerke R^2	0.443		0.551	
n	1,672		1,328	

* $P<.1$ ** $P<.01$ *** $P<.001$

5. 結言

儀礼意識、互酬性意識の強さが、宗教的意味合いや返礼志向、さらには伝統や正式な規範などの考え方と相まって、結婚式・披露宴の実施に影響を及ぼす、との仮説については、「結婚式志向」と「披露宴志向」の順序ロジスティック回帰分析の結果、概ね支持されたと考えられる。特に女性は、通過儀礼や社会的立場を男性以上に重視するようである。結婚式や披露宴の手順やルール、そしてそれが持つ伝統や神聖な意味づけや相手・親・自分の世間体である。女性はこうした“決まり事”や“メンツ”を大切にする考え、それが結婚式や披露宴の実施支持に正の影響を与えていることが示唆された。他方で、男性は世代年収の高さが結婚式や披露宴の実施に強く影響するものの、女性にとっては関心事項とは言えなかった。また、女性は最終学歴が高いほど、あわせて正規労働者であることが結婚式や披露宴に前向きなことが分かった。したがって、今回の分析では、高学歴な女性は婚姻市場における価値が高く、婚姻により得られる利得も大きいために婚姻意欲が強いとするつり合い婚仮説が肯定される結果となった。

本稿で調査対象とする 20 歳～50 歳までの未婚者が、実際に婚姻儀礼を行う場合には、結婚する当事者間、さらにその家族を含めた周囲の“意見を述べる人たち”と“自分たち

が出席した結婚式・披露宴”が意思決定に影響を与えると想定される。しかしながら、たとえそうであっても、婚姻する場合に各種各層で最終的に意思決定をする当事者は現在の未婚者であり、こうした人々が結婚式・披露宴にどのような儀礼意識を持っているのかは、ブライダル産業はもとより、経営学分野を含めて注視されるべきである。本稿結論は「こういう考えを持つ人が、結婚式や披露宴に前向き」として記述したが、忘れてならないのは図表4-3の通り“30代以上の未婚者の過半数は結婚式も披露宴も「行いたくない」という現実である。果たしてこのように考える未婚者は増加しているのだろうか、また低年齢化が進んでいるのかどうか、考えを転向することはあるのだろうか。この論攷を徒や疎かにせず未婚者の婚姻儀礼に対する意識考察を継続するつもりである。

◆参考文献

- Becker, Gary S. (1981) ,A Treatise on the Family, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gennep,A. (1909) ,Les Rites de Passage, Etude Systematique Ceremonies, Librairie Critique, Paris(A. ファン・ヘネップ著,綾部恒雄・織部裕子訳,2012,『通過儀礼』岩波書店)
- G,Flaubert. (1857)『Madame Bovary』(ギュスターヴ・フローベール著,伊吹武彦訳,1960,『ボヴァリー夫人』岩波書店)
- Leach,E. (1976), Culture and Communication. (エドモンド・リーチ著,青木保・宮佐敬造訳,1981,『文化とコミュニケーション-構造人類学入門』紀伊国屋書店)
- Oppenhemirr, Valerie Kincade, (1988) “A Theory of Marriage Timing,” American Journal of Sociology, 94 (3) : 563-591
- 伊藤幹治 (1984)「日本社会における贈答の研究」『日本人の贈答』伊藤幹治・栗田靖之編, ミネルヴァ書房
- 片木篤 (1988)「あこがれのウエディング・ショー-結婚の儀式と空間」『季刊へるめす』第15号,岩波書店
- 清水昭俊 (1988)「儀礼の外延」『儀礼-文化と形式的行動』青木保・黒田悦子編,東京大学出版会
- 南知恵子 (1998)『ギフト・マーケティング』千倉書房
- 山田昌弘・白川桃子 (2008)『婚活時代』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 第15回出生動向基本調査」
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_report3.pdf 2019.1.15 閲覧
- マリアージュ彦根 HP <https://mariagehikone.jp/banquet/chatoyant/> 2019.1.15 閲覧